博物館の強い味方、博物館クルー活躍中！

皆さんは「博物館クルー」という言葉をご存知でしょうか？

歴史と民俗の博物館では、平成 18 年の再編後の開館当初から「新たに開設するゆめ・体験ひろばで実施するさまざまな参加体験型事業に、専門的な技術を保持する県民の参画を求めるとともに、県民の伝統文化に関する自主的活動の支援を目的」として、「埼玉の地域文化（伝統工芸・地場産業・民俗芸能等）に根ざした活動テーマと専門的技術を保持」するとともに「館が実施する事業に専門的な協力を継続的に行う」ことのできる団体を「博物館クルー」として登録しています。

平成 29 年度に「博物館クルー」として登録している団体は「さきたま藍染研究会」「屋台囃子サークル・唐破風（からはふ）」「衣紋（えもん）の会（かい）」の 3 団体です。

それぞれが「伝統的な藍染め技法」「県内に伝承される各種お囃子の演奏」「有職故実にもとづいた伝統装束の着装法」といった専門的なスキルを持った団体で、当館で実施する「藍染めストール作り」「お囃子体験教室」「十二単の着装体験」などの事業で講師を務めています。また、体験ボランティアの研修指導なども行っています。

博物館とクルーの関係は、博物館側が活動拠点を提供するかわりに、クルー側はそれぞれが持っている専門的スキルを館事業に提供するというギブ＆テイクの関係が成立しているのが特徴です。

それぞれのクルーは独自に会則を持ち、月に 2 回ほどのペースで館の施設を使って自主的な活動をしており、それぞれスキルの向上を図っています。

こうした「博物館クルー」も、もとをただせば体験教室を受講した卒業生の一部有志が集まり自主的サークルを作り、指導講師であった職人さんの直接指導を得るなどして今日に至っているケースもあります。

また、館事業の講師を務めることで、さらなるスキルアップの必要性を認識し、自主的活動のモチベーション維持にもつながるという好循環を生み出しているケースもあるようです。

藍の型染めを指導する「さきたま藍染研究会」

お囃子体験教室で指導する「唐破風」

伝統装束の着付けをする「衣紋の会」

歴史と民俗の博物館では、講座の受講生や博物館ボランティアが博物館クルーへステップアップするというように、これからも県民の学習意欲のインプットとアウトプットの両方の機会を提供できる循環型生涯学習施設を目指してまいります。

（学習支援担当　二階堂 実）

歴史のしおり 79

写真で見る105年前の笊と籠

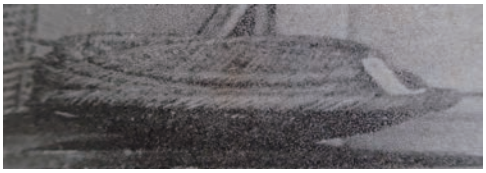
『木材の工芸的利用』の笊籠製品写真図版の1例

今から１０５年前の明治４５年（１９１２）３月に、農商務省山林局が編纂し大日本山林会が刊行した『木材の工芸的利用』という書籍には「笊籠用材」の項目で、当時東京で流通していた笊や籠が７枚の写真図版に掲載されています。撮影に協力したのは、江戸時代に籠職人の町「亀井町」があり、明治以降は荒物問屋街にもなっていた「日本橋小伝馬町」在住の葛籠職人兼荒物問屋と考えられ、写真は同地に入荷し流通していた製品のものと思われます。それらの中には、本県で作られた笊をはじめ興味深い製品がありますので、その一部をご紹介します。

右奥が本県の赤山笊、左奥は山梨県の甲州笊

まず、本県で作られた製品です。本文中には東京で流通した製品として、川口の赤山笊、所沢の安松笊、大里郡の養蚕籠が紹介されています。写真図版では、赤山笊（米揚げ笊）と赤山の俵上戸（俵に米を入れる漏斗）が掲載されています。赤山笊は赤山周辺の農家約１５０軒が副業で生産し東京方面に流通していた笊で、同書には詳細な報告も記載されています。農村で生産して東京市街で流通していた製品の写真は、赤山笊の他に江戸川の小岩笊（篠崎笊）、多摩の宇津貫と由木（柚木）の目籠、千葉県の上総笊、山梨県の甲州笊（郡内笊）、神奈川県の小田原笊（相模原市立博物館の加藤隆志氏のご教示で川村笊と同一と判明。川村笊は鉄道の開通により山北町から出荷された製品）が載っています。

さて、『木材の工芸的利用』には、職人や農家が作った製品の他に、江戸時代に諸藩の江戸屋敷に勤めた下級武士が内職で笊や籠を作っていたという記述があり、それらの製品も紹介されています。残念なことに製品の名称に大名の苗字がついているだけで、詳細事項を確認することは難しいのですが、写真図版にも数点の掲載があり、幕末から４５年を経た当時も定番商品化となり同製品が誰かの手によって作られ流通していたことがわかります。



かつては武士の内職で作られたとされる本多平亀子（笊）

また、現在では名称から用途の推測が難しい「用心籠」といった製品もあります。小学館の『日本国語大辞典』によれば、江戸に多かった火事などの災害時に家財の持ち出しに使った籠だったようです。

一方、近代的な制度や西欧的な生活様式が取り入れられて以降に新たに作られた製品として、丸煮籠陸軍用、丸煮籠海軍用、石鹸籠、牛乳配達籠、ラムネ籠、ビール籠の写真があります。特にビール籠は半ダース、１ダース、２ダース用の３点の写真が掲載されています。

左写真奥が用心籠　右写真はビール籠（２ダース用）

このように『木材の工芸的利用』は、地方から東京に出荷されていた製品や、江戸時代の暮らしの面影を想起させるような製品、さらに明治以降に新たに生み出された製品など、明治末の多彩な笊籠事情をビジュアルなデータも含めて現代に伝えてくれる興味深い資料です。現在では国立国会図書館のホームページからも閲覧ができますので、関心をお持ちの方はご覧いただければと思います。

（学習支援担当　服部　武）

学芸員ノート　季節展示「栗橋宿を掘る」会期：9/13(水)-10/22(日)

現在季節展示室では「栗橋宿（くりはししゅく）を掘る」と題して、埼玉県内における江戸時代の宿場町の発掘調査成果を紹介しています。ここでは栗橋宿の概要と展示の内容をご紹介いたします。

栗橋宿は埼玉県北東部の久喜市栗橋に所在した宿場町です（図１）。江戸と日光を結ぶ街道である「日光道中」の７番目の宿場町として栄えました。関東郡代伊奈忠次（いなただつぐ）の命により慶長年間（１５９６－１６１５）に元栗橋の住人が「新栗橋」を整備したのが栗橋宿の始まりとされています。

元和７年（１６２１）赤堀川が開削されて利根川が常陸川につながり、銚子沖に流れるようになったことで利根川はほぼ現在と同じ流路になりました。栗橋宿はこの時から日光道中唯一の渡河地点となり寛永元年（１６２４）に「房川渡（ぼうせんわたし）」の関所が設けられ、番士４家が勤番していました。

番士の足立家による関所の記録は江戸時代の勤番武士の様子を今に伝える貴重な文書としてその一部が県の有形文化財に指定されています。

また、文献上の記録から栗橋宿における災害と復興の歴史を読み取ることができます。明治２年（１８６９）に関所が廃止されるまでの間で、記録に残っているだけでも洪水１６回、火事６回、地震１回、大風１回、火山噴火１回の計２５回もの災害が確認されています。

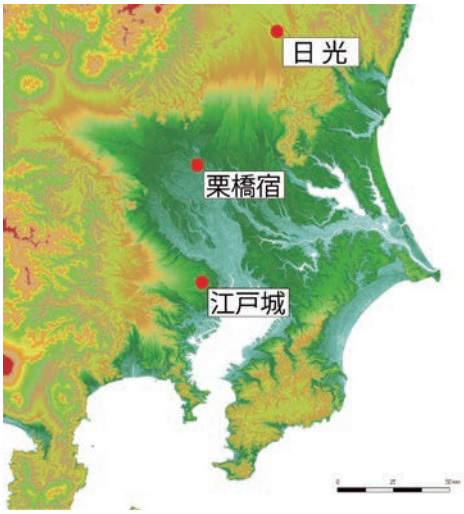


図１　栗橋宿の位置図

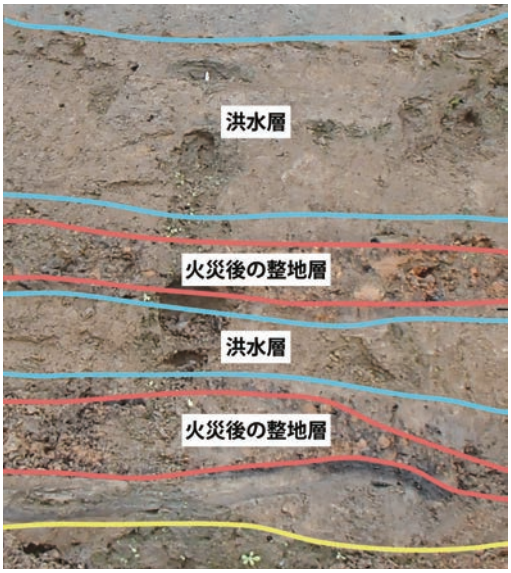


図２　地層からみる災害と復興の歴史

今回の展示では「栗橋宿跡」の発掘調査によって出土した資料を紹介しています。

平成２４年度から始まった発掘調査によって、文献上で数多く確認された災害の痕跡が検証されてきています。また、堆積している地層の状況からは、度重なる災害とその後の復興の様子がわかりました（図２）。さらに、建物の基礎には軟弱地盤を安定させる工夫がみられます（図３）。今回の展示を通じて栗橋宿における災害と復興の歴史をご紹介します。

本展では、災害を乗り越えた栗橋宿の人々の「強さ」を感じていただければと思います。

（展示担当　青笹基史）

図３　建物の基礎にみる軟弱地盤対策